

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(中学校用)

都道府県名	大阪府
-------	-----

・学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	池田市立池田中学校					
学 年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	4	5	1	14	31
生徒数	153	151	173	4	481	

・研究の概要

1. 研究主題

個の学びを生かした指導方法の工夫・改善

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

○ 2年生・数学

2年の単元から連立方程式の文章問題や1次関数や論証を必要とする『図形の証明』が始まる。これらの取り組みに、よりきめ細やかな指導を行うため少人数授業を用いる。

○ 1・2年生・理科

1・2年生時において、「意欲を持って授業にのぞむこと」、「学びから逃走するのをくい止めること(学習をあきらめないこと)」が、学力向上の基礎だと考える。1年生では実験器具の使い方の指導がこまめに行える。2年生では実験に一人ひとりが積極的に参加できる。1・2年を通して、落ち着いた雰囲気の中で互いに学びあうことに価値を持てるようにしたい。

○ 2年生・英語

昨年度は1年生で実施したが、同じ生徒達を対象に少人数授業を継続導入することにより、「教え合い、励まし合い、学び合いながら、互いの意欲を高め、学習を深める」生徒集団の一層の高まりを目指したい。

(2) 年次ごとの計画

平成14年度	<p>テーマ</p> <p>学習意欲の向上のための少人数制授業の活用。</p> <p>研究の見通し(仮説)</p> <p>生徒の表現力や体験的知識を高め、学習意欲の向上をはかるには、少人数制授業の活用が効果的である。</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>・クラスや学習集団の分割方法や担当者について検討・工夫し、授業実践をする。</p> <p>・生徒の体験やコミュニケーション活動、理解の過程を中心に据えた授業の実践やきめ細やかな課題点検を行う。また、生徒へのアンケート調査を実施する。</p> <p>・教育課程保護者説明会の開催や学力向上研究推進委員会の設置、研究座談会の活用を通じて、学力向上フロンティア事業の意義・趣旨に対する生徒・保護者・職員の理解を高める。</p>
--------	--

平成 15 年度	<p>テーマ</p> <p>生徒自らの課題認識能力と選択能力の育成。</p> <p>研究の見通し(仮説)</p> <p>一人ひとりの学びを大切にした授業のあり方を探求することが、課題認識能力と選択能力を高め、学習意欲の向上に寄与する。</p> <p>研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・効果の測定や形成的評価の実施に必要なデータ収集と分析方法の研究。</li> <li>・単元や生徒の学力に応じた分割・授業形態の工夫。</li> <li>・基礎・基本の定着と学力向上のための指導・評価計画の作成。</li> <li>・施設利用の改善と工夫。(教室や机の配置等)</li> <li>・アンケートによる学習意欲の分析と検討。</li> <li>・小テストによる理解度のチェック。</li> <li>・研究者との連携による評価方法の検討と改善。</li> <li>・選択授業の内容と形態の工夫。</li> <li>・公開授業の設定と他校との研究交流の推進。</li> </ul>
----------------	---

平成 16 年度	<p>テーマ</p> <p>評価を生かした学習指導の工夫改善。</p> <p>研究の見通し(仮説)</p> <p>授業形態、指導方法の工夫改善は、生徒の意欲や関心、および学力の評価を生かしてこそ客観的なものになる。</p> <p>研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでの研究結果を日々の学習指導にフィードバックしながら、検証することによって、一層の工夫改善をすすめる、今後の本校生徒の学力向上の方向性を見出していく。</li> <li>・年間指導・評価計画の検討・調整。</li> <li>・授業公開等による、近隣の学校への研究成果の発信。</li> <li>・冊子等による、研究成果の発表。</li> </ul>
----------------	---

### (3) 研究推進体制

学力向上推進委員会	}	<p>学校長・教頭</p> <p>研究部 (学力向上・選択教科推進・総合的学習研究・ボランティア推進・ふれあい事業・人権教育推進)</p> <p><b>教科代表(数学・理科・国語)</b></p> <p>少人数授業担当者</p>
<p>研究指定を受けた、平成 14 年度 4 月に「学力向上研究推進委員会」を設置。メンバーは、学校長・教頭・研究部長・研究部職員・少人数加配教員・数学科、理科、英語科の教科代表である。分割方法や授業の展開についての検討を行い、成果や課題について話し合う。また、フロンティア事業との関連性も持たせながら、評価方法や総合学習・選択学習のあり方について検討し、全校レベルでの授業研究会の開催や研修会への教員の参加を</p>		

促進する。校内研修会や授業公開では学期に一度、大学で研究に携わる先生を招き、生徒の学習意欲の変容や評価のあり方について研究を深める。

## ・平成 15 年度の研究成果及び今後の課題

### 1 . 研究の成果

数学科においては、課題テストの結果、66.7%の生徒が 60 点以上をとっており基礎学力の向上がみられた。また、これに満たない生徒に対する指導でも、個々のつまずきを知り、その指導に効果的なアプローチの方法の改善、工夫を凝らすことができた。年間を通して、一人ひとりの学習への取り組みの様子の把握が容易になり、発言に対する対応も丁寧にできるなど、よりきめ細やかな指導ができた。

理科では、いままで消極的だった生徒たちが、きめ細やかな実験観察の指導を通して、意欲的に学習に関わるようになってきた。ファイルやレポートの点検回数の増加や、それに対する評価のフィードバックによって、学習意欲を高めた生徒も多い。また、少人数授業の落ち着いた雰囲気作りを有効に生かし、互いに意見を交流できるようになってきている。授業づくりのポイントとして「考える時間をつくること」を意識しているが、生徒たちにも教師にも学びあう雰囲気作りができてきている。

英語科では、まとまった文章を読んだり、書いたりする機会が増えた。リーディングによる理解度のチェックや、英作文で文章作成中の指導に多くの時間を使うことができた。そして何より、生徒間の教えあいやより良い刺激の与えあいにも分割授業は大いに役立った。

また、公開授業に向けて、全ての教科において授業内容についての見直しが行われ、ビデオによる校内授業研究会の実施を初めとして、子どもの学びを見つめた指導内容の充実に向けての研究が活発化してきた。

### 2 . 今後の課題

授業に対する生徒の積極的な関わりが向上したが、学力の定着については、基礎的表現力や計算力の無い生徒や、学習習慣の充分でない生徒が多く、数値的な向上にはっきりとは結びついていない。少人数授業を生かしつつ、意欲関心をより高めながら、数値に表れる学力に結びつけたい。そのために、学力テストの単元によるきめ細かな分析等により、具体的な方策を検討する必要がある。

そして、全ての生徒の学力向上に寄与するよう、さらなる意欲づけの方法についても検討が必要である。1 つのクラスを2つに分割するにあたり、基本的に、男女の割合や出席番号、定期考査の結果を参考にする等の方法で分割を行ってきたが、2 つの集団の雰囲気や活発さに開きが現れた。来年度は、単元や評価の観点ごとに集団の構成や分割方法の工夫等、より細かい指導方法のあり方についての検討が必要である。また、常に2分割にこだわるのではなく、T-T等、指導の効率を高めるための状況に応じた積極的な学習集団の編成・展開が要求される。さらには、「学習集団を支える生活集団」の考えから、教科担任と、学級担任の密なる連携も要求される。

